



「十二宮小品集2 予言する雄牛」

太田忠司（画・YOUCHAN）

男は唯一の財産である年老いた雄牛を連れて市にやっできた。

できることなら売りたいはなかった。しかし病に伏せる妻のため、泣く泣く決断したのだった。

陽が昇ってから西に傾くまで男は待った。しかし買い手は現れなかった。

夕闇が迫る頃、男は深い溜息と共に市を後にした。

家へと戻る道すがら、男は家で床に就いている妻を思い、涙を流した。

「お待ちなさい」

声をかけられたのは町外れの四つ辻だった。振り向くと、小柄な老人が立っていた。髪も髭も白く、このあたりでは見かけない奇妙な服を着ていた。

「あんた、市にその牛を売りに来たのかね？」

「はあ」

「売れなかったんだな」

「乳は出るのかと訊かれました。雄牛だから乳は出ないと言うと、そっぽを向かれました。荷役に使えるかと訊かれました。老いているのできつい仕事には向かないと言うと、笑われました。この牛は役立たずです。私と同じです」

老人は近づいてきて、じっと牛の眼を見つめた。

「いや、なかなかいい牛じゃないか。売れなかったのはこいつのせいじゃない。あんたの商売が下手だったのだ。明日も市はあるのだろうか？ もう一度売りに出すといい」

「でも、また一日無駄にしてしまうだけでは……」

「だから売り方次第だと言っておるのだよ。わしの言うとおりにするといい」

翌日も男は雄牛を連れて市に現れた。

「そいつは雌牛かね？」

通りかかった商人に訊かれた。

「いえ、雄牛です」

「じゃあ駄目だ。俺は乳がよく出る雌牛を探しているんだ」

「乳は出ませんが、こいつには特別な力があります。未来を見通せるんです」

「何だって？ おまえ、冗談でも言っているつもりか」

「いいえ。本当です。こいつには明日のことがわかります。嘘だと思うならあなたのことを訊いてみましょうか」

男は牛に耳打ちした。すると雄牛は苦しそうな声で唸った。

「お氣をつけなさい。あなたは明日、足を挫くと言っています」

「馬鹿な。脅かそうだったってそうはいくか」

商人は怒ってその場を立ち去った。

しかし翌日、同じ場所で男が牛を連れて立っているのと、杖をついた商人がやってきた。「嘘じゃなかった。あれから家に帰ろうとしたとき、不意に飛びかかってきた鳥に氣を取られて足を滑らせた。そのときに思い切り足を挫いちまった。この牛の言っていたことは本当だ。こいつはすごい」

商人は金貨の入った袋を取り出した。

「是非とも、この牛を売ってくれ。いくらだ？」

「金貨三枚です。ただし」

男は言った。

「この牛が言っていることを理解できるのは、私だけです。牛だけ買っても意味はないですよ」

「じゃあ、おまえも雇おう。おまえはいくらだ？」

「支度金に金貨五千枚。そして日当が一日金貨五枚」

「なんだと!? そんな大金、払えるものか」

「では致し方ありません。さようなら」

男は牛を連れて、その場を去った。

次の日も、男は牛と共に市に現れた。すでに彼のことは市中の噂になっていた。

「俺のことを占ってくれ」

若い兵士がやってきた。

「今日これから御前試合に出る。俺は勝てるか」

男は牛に耳打ちする。牛は一声鳴いた。

「おめでとうございます。あなた様は優勝されるそうです」

「おお、そうか!」

兵士は喜び勇んで帰っていった。

その翌日、男の元に王宮からの使者がやってきた。

「陛下が是非ともおまえとおまえの牛に会いたいと仰せだ。参られよ」

男は牛を連れて王宮に入った。

謁見の間には王と、昨日の兵士がいた。

「この者の優勝を、おまえの牛が予言したそうだな」

王は言った。

「面白い。わしがおまえとおまえの牛を雇おう。だからわしの、いや、我が国のことを占つてくれるか。長く続いた隣国との諍いは一向に収束する気配がなく、それどころか隣国が我が領土を狙っておるといふ噂もある。ならばこちらから一気に奇襲をかけて敵を打ち倒すべきか、あるいはあくまで和平を望み、交渉にて関係を修復すべきか。占つてみよ」

男は王に恭しく一札すると、牛に耳打ちした。今回も牛は鳴いた。

「恐れながら申し上げます。攻めるが吉、とのことございます。王御自ら軍の先頭に立つて攻め入れれば、敵軍は容易に蹴散らせましょう」

「おおそうか。ならば早いに越したことはない。早速兵を挙げるぞ」

王はすぐさま兵士を集め、自らが先頭に立って隣国に攻め入った。

が、隣国はあらかじめ罫を仕掛け、王の軍隊を待ち構えていた。その罫に嵌まり、真

っ先に命を落としたのは王自身だった。王の軍は総崩れとなり、たちまちのうちに全滅した。

隣国は勢いに乗って攻め入ってきた。それを防ぐ力は、もうこの国には残っていないかった。隣国はあっさりと征服に成功した。国土が焼け野原にならなかつただけ、まだまじだった。

男の許にあの老人がやってきたのは、隣国の王が王宮を接收したその日だった。

「どうして、どうしてこんなことになったんですか」

男は老人に言った。

「あなたの言うとおり、牛に耳打ちするふりをして針を刺し、牛を鳴かせました。そしてあなたが教えてくれたとおりのことを言ってみました。そしたら牛が予言したとおりになつた。あなたのほうが予言者だったのでですか」

「予言を本物にすることなど、造作もないことよ」

老人は笑つた。

「商人に鳥をけしかけて足を挫かせる。兵士の対戦相手に一服盛って負けさせる。どれもわしには簡単なことだった」

「では……王への予言は……」

「あれも、わしの思惑どおり。絶対に勝てると言われたら、あの調子者の王のことだ、真つ先に攻め入ってくるに違いない。そう予測して待ち構えておれば、こちらの勝利も易いものよ」

「こちらの？ では、あなたは隣国の……!!」

「この国も、これから我が国の統治下に入る。戦火にも晒されず、無傷のままだな」  
老人は、また笑った。

「真の軍師は無闇に戦などせん。美味しい果実を美味いまま、手に入れる算段をするものさ」

そう言うと、老人は引き連れてきた荷馬車を指し示した。

「あそこにおまえへの報酬が積まれておる。支度金として金貨五千、それに日当も合わせてな。これだけあれば女房の病を直すこともできよう。いや、ご苦労であった」

老人は去った。

男は金貨の積まれた荷馬車を前にして、ただ悄然と立ち尽くしていた。